

## 近江商人の里～武佐宿 12km を歩く

3月6日久しぶりにいつもの4人で中山道を歩きました。昨年の11月に鳥居本から豊郷を歩いて以来、雪模様のお天気や腰の具合からなかなか実施できませんでした。天気予報では気温も上がり春めいた陽気になりそうでした。

### 一番列車で彦根駅へ

東浦駅 5:55 の一番列車に初めて乗った。かなりのお客が乗っていた、もちろん仕事の人がほとんどだ。われわれみたいにのんびり街道ウォーキングに行くとか、遊びに行くらしい人は見えない。そもそも、なぜ一番列車でないといけないのかというと、近江の豊郷から愛知川・武佐と12kmほど歩いて、18:00 ころに帰るためだ。ただ新幹線を利用すればもっとゆっくりできる、でも、この旅は鈍行で行くことにしている。年金生活者でお金はなくとも時間はある、この特性を活用しなくてはいけないと思うからだ。

大府で乗り換えた快速大垣行きもほどほどに混んでいて、好きな席に4人座ることはできなかった。金山で4人同じ席に座り、名古屋・一宮と過ぎてもお客さんは増えてく

る。通勤時間帯とはいえ混雑するのは、せいぜい大垣までだろうと思っていた。しかし、大垣で乗り換えた米原行きも同じような混み具合であった。大垣へ来る人は多くても、米原方面へ行く人はさほど多くはないだろうと思っていたので意外だった。大垣と米原間は東海道本線だが、武豊線と同じで1時間2本の運転しかなくローカル線並だ。米原でJR西の快速電車に乗り換え彦根着8:12、今度は近江鉄道に乗り換える。一番端にあるホームへ移動して、駅員に「豊郷2枚」と言うと、こちらとばかりに隣の自動券売機を指差す。駅員がいるの



におかしなことだと思ったが、駅員の手元には切符はないのだ、電車から降りてくる人から切符か料金を受け取るためにいることが分かった。8:22 八日市行の一両だけの電車は白いボデーにライオンのマークがついた、西部鉄道の払い下げ車両だ。彦根駅を出てしばらく走り高宮駅を過ぎると、線路は新幹線の盛り土脇に沿って直線区間が続く。30分ほどで豊郷駅に到着するが、地図を見るとさらに先の愛知川駅辺りまで 5.5km ほど直線が続く。

## 駅ホームの弱者対策はどうあるべきか

豊郷駅で降りると駅出口は、線路を横切って反対ホームへ行く構造で、丁度反対電車とすれ違いのため、両方の電車が発車するまでホームの端で待たされた。このことで話題となったのが、武豊線で一定以上の乗降客のある東浦駅にはエレベーターを設置するというニュースだ。JR がすべて負担ではなく、地元負担は大きいらしい。でも、ほんとにエレベーターを設置することが最善なのだろうか！ ないよりあった方がよいことはもちろんだが、投資と効果をしっかりと詰めて結論がだされたのか。エレベーターしか対処法がないのか、他の方策について検討したならそれらも示してほしいものだ。

つまり、ここ豊郷駅のように昔ながらの構造で反対側ホームへ行くことにして、且足腰の弱い人のためにはスロープをつければよい。これでやってみて問題があれば、さら



豊郷駅に到着

のようなものなのか聞いてみたいものだ。

に改善を重ねるのだ。そして、財政も豊かになればエレベーターも設置すればよい。加えて、エレベーターが設置されるまでの間はどうに考えているのか聞きたい。この駅は前回紹介したように、町のコミュニティーセンターでもある。スタート前にトイレを借りたが、とてもきれいでしかも障害者用の大スペースのトイレも設置されていた。コミュニティーセンターとしての、活用頻度はど

## 「アケボノ缶詰」の元祖

すっきりして 9:10 ころスタートした、前回見学した伊藤忠兵衛の碑と館の前を素通

りして行くと、リュックを背負う一人の若者が見学できないかと案内板の時間などをのぞきこんでいた。しばらく行くと石板を井桁に組んだ井戸があり、新しそうな説明板がある。それによると、この辺りは「水の香る郷」四谷地区で、この井戸は「金田池」とある。昔は中山道を旅する人たちの喉をうるおしたばかりか、田の用水にも使われたと記されている。



近江商人の藤野家本宅跡



江州音頭発祥の地の石碑

それをうらづけるかのように小さな酒屋さんがあり、裏手には大きな煙突が残る造り酒屋と思われる建物が目についた。そこから5分も行くと一里塚跡の碑があった、その説明によるともとの一里塚はここではなく、800mほど北の豊郷町役場付近だったと言う。ここ石畑は中山道高宮宿と愛知川宿の中間点で、間の宿と呼ばれ八幡神社付近には立て場茶屋があり、旅人でにぎわい石畑は一里塚の里と呼ばれたという。

その隣には資料民芸館があつて、白壁に大きな北前船が描かれてその説明が書かれている。それによると、この家は蝦夷と内地を北前船の交易で富を得た近江商人の藤野家本宅跡と記されている。明治初期に入ると我が国初めての鮭缶の製造を始め、五稜北辰の商標「星印」で販売し人気を博しました。今日では「アケボノ缶詰」として受け継がれています。また天保の飢饉のときには、住民救済のため飢饉普請は有名で江州音頭発祥の地「千樹寺」の再建に尽力したという。

そこからすぐのところ千樹禅寺があり、江州音頭発祥の地の石碑とこれも立派な石板の説明があった。この江州音頭がどのようなものなのか知らないが、説明からして要は盆踊りのことらしい。そこにはさらに「扇踊り 日傘踊り 中山道千枝の里」と彫られた立派な石柱もあった。

## 歌に詰まって「歌詰橋」

5・6分も行くと宇曾川を渡る、その橋の名前は「歌詰橋」で、渡りきると立派な説明板があり橋の名前などの由来が書かれていた。この川は水量が豊富であったため舟運が盛んで、人や物資はもちろん、重い石も運び、木材も丸太のまま流していたと言う。このことから運槽川と呼ばれていたのが「うそがわ」となまったらしいという。

橋の名前は天慶3年(940)平将門が藤原秀郷によって東国で殺され、首を上げられた。秀郷が京に上がるためここまで来た時、目を開いた将門の首が追いかけてきたため、将門の首に対して歌を一首といい、言われた将門の首はその歌に詰まり、橋の上に落ちた。その橋がここであるという伝説から、この橋を「歌詰橋」と呼ぶようになったとか。この辺りは石橋地区で、将門伝説の町という案内板が立ち、次の愛知川宿まで 2.1km の案内が目についた。

## 本陣は後に銀行？ だった愛知川宿

橋を渡って 18 分も歩くと沓掛で道は分岐する、ここを右に進むと直に沓掛小学校があり珍しく石の二宮金次郎がたたずんでいた。その先には大きくて見事に剪定された庭木と、白い漆喰にムシコ窓の立派な家が現れた。すごい家だなあと感心していると今度は大きな鳥居が現れ、「どちらからおいでたかね」と声がかかった。



愛知川宿の看板とポケットパーク

見ると鳥居の隣の家の二階からおじさんが顔を出している。「愛知と書いてあいちです」と答えると、それじゃ同じ地名だと笑っている。出かける前の5日の天気予報では

雪模様だったが「昨日は雪降りましたか」と聞くと「いやいや良い天気だった」という。的確な天気予報は難しいようだ。そこから2分も行くと街道の真上に「中山道 愛知川宿」と書かれたゲートが立っている。広くもない道幅が昔の街道らしく、案内ゲートもしっくりくるものがある。その先には延命地藏があって、愛知川宿北の入口という石碑があった。そのすぐ先の交差点にポケットパークが整備されて、愛知川宿の立派なモニュメントがあり、隣に「書状集箱」が並んでいる。説明によると、明治4年当時の形を再現したポストで実際に使用されているもので、宿場町として栄えた記念として作られたとある。

ここ愛知川宿は中山道 69 の内 64 番目の宿場、本陣 1、脇本陣 2 旅籠 28 軒の宿場だった。さらに 5 分程行くと木造ではなくモルタル仕上げの家が現れ、手前には「源町 本陣跡」の案内板が立っている。建物のつくりは、どう見ても銀行であったようだ。前を行く友が通りかかった人に聞くと、モルタル造りの建物の後ろに今も子孫の方が住んでいると言う。その家のつぎには八幡神社があり、入り口の灯籠の隣に「高札場跡」の小さな石柱が立っている。

## 袖うだつのある家と歴史ある料亭

この辺りが宿場の中心であった証でもある、そのとき一人のお年寄りが声をかけてくれた。街道を歩いてことを話すといろいろ話をしながら、ぜひ私の店がすぐ先にあるので立ち寄ってくれと言う。話しながら行くと、ここが私の店と言ってわれわれを招き入れ、壁に掛けてあるタバコのコレクションを自慢げに見せてくれた。そこには珍しい阪神タイガースの虎の顔が印刷されたものなど、見たことのないものばかり。



袖うだつの家



料亭・竹平楼（たけへいろう）

でも、ホープ、光、シンセイ、ピースは知っている。

タバコ屋をでると立派な家が立ち並ぶ通りで、袖うだつを備えた家が数軒並び、今度は問屋跡の石柱もあった。その先に大きな店が現れた、近江つけもの「マルマタ」の看板が2階の格子窓につけられた立派な建物。その次は明治天皇が休憩された記念碑があり、これも街の中心であることを物語る一つだ。その先に今度は大きな提灯を二つ掲げ白い漆喰の壁の門が現れる。背後にはこれまた立派な見越しの松がそびえている。料亭・竹平楼（たけへいろう）である、宝暦8年(1758)創業といわれ、江戸時代は旅籠という老舗。でもお高くて近寄りがたい感じだ。

## 愛知川を渡る「むちん橋」

料亭・竹平楼（たけへいろう）から10分も行くと愛知川を渡る、その手前に「恵智川むちんばし」の説明板があった。でも、道路の植栽が邪魔して文字が読み取れません。せつかくの説明板がこれではだいなしで残念なことです、作ることは一生懸命になっても、それらを維持することは何故おろそかにされるのでしょうか。われわれ日本人はやるべきことをやるが、ゆっくり振り返ることをしないからでしょうか。

今、道路やトンネルなど国民生活に重要な施設の維持管理体制が問題になっています。これは役所だけの問題ではなく、社会正義を標榜するマスコミはもちろん、国民一人一人が問われる問題だと思えます。では何ができるのか、何をしなくてはいけないのか!! そんなことを考えさせられるひとこまでした。

この橋は文政12年(1829)に町民の成宮弥次右衛門ら4名が計画して、天保2年(1821)に完成した。本来、橋を架けることをゆるさなかったのが、幕府の政策だった。交通手段の維持が幕府や領主ではなく、町民の手にゆだねられはじめたのだ、そのためこの橋は無料で渡ることができ「むちん橋」といわれた。現在の橋の名前は御幸橋、渡り終えるとローソンの看板が見えて東近江市に入る。

## 近江商人のふるさと「てんびんの里・五個荘」

橋を渡ると交差点で左折して、すぐに大きな灯籠が立っている。「太神宮」と彫られた灯籠の屋根?が変わっている、立派な家の屋根みたいなのだ。文字も「大神宮」ではなく「太」が使われているのはどうしてかな?

灯籠から15分も行くと総2階建ての大きな家が現れた。一部に漆喰が使われ飾りも

あり、2階建ての屋根の上には煙だしまいたいな小さな屋根がある。どっしりとした造りは並の家でないことは明らか、家の前にお酒の自販機があるので、ひょっとしたら造り酒屋か。でも、背後にそれらしい建物はなかった。その先に小公園があり、ここにも「太神宮」の灯籠が立っており、「村中安全」の文字も彫られている。



愛知川を渡る



梵鐘のある家

ここから4分も行くと五個荘の郵便局があり、その先にはすばらしいデザインの東近江市市役所五個荘支所の近代建築が、存在感を誇示しているかのように構えている。そして、市所前のバス停脇に大きな松の木が一本だけ残り、古い街道と新しい街のアンバランスが何故か美しい絵になっている。市所前の一本松から4分も行くとポケットパークが整備されており、そこには中山道五個荘の分間延絵図が設置されていた。この絵図は江戸幕府が文化3年(1806)に作成したものと説明書きがある。その場所から先には松並木が少しだけ続いていた。中山道の面影を偲ぶ雰囲気作りとして、ポケットパークとともに整備されたものだろう。少し行くと一軒の家の門の前に、かなり大きな梵鐘が置かれていた。門の先に見える屋敷の前にも、ブルーシートにくるまれた梵鐘と見られる物が二つ置かれていた。どうやらこの家は梵鐘を作っているようだ。

## 近江商人の理念「三方よし」

せっかくこの地を訪れたので、中山道を離れて近江商人博物館を見学する。その先には近江商人たちの屋敷が残る重要保存地区「金堂の町並み」があるのだが、今回は帰りの時間の都合で博物館見学のみとした。中山道から離れて15分ほどで博物館に到着し

見学したが、こうした場所は撮影禁止のため記録が残せない。そのためわずかな記憶といただいた資料から、近江商人の活躍を整理してみた。一口に近江商人と言いますが、八幡商人、日野商人と湖東商人（五個所・愛知川・能登川など愛知川流域からでた商人）のことを言います。今回はこの中の五個所を訪れました。



近江商人博物館



天秤姿の近江商人の像

館内には近江商人を紹介する映像コーナー・体験コーナーなどがあります。ビデオを一通り見てから館内を回りましたが、一番記憶に残っているのがやはり体験コーナーです。天秤棒で実際に担いだとされる重さの物を担いでみました、もちろん担ぐことはできませんが、これでどれだけの距離を歩くのか。とても大変なことだろうと想像します。彼らは全国津々浦々まで行商し、やがて豪商といわれるほどに出世した近江商人たち。何故、彼らは成功してその名を残すことができたのでしょうか。そこには商いに対する彼らの哲学がありました、それが「三方よし」の考えとして伝えられています。

彼らは近江の商品を各地に運び販売しただけではありませんでした、全国の情報津々浦々に運び、A地の特産品をそれを必要とするB地に運び販売したのです。現在なら各地の情報は容易に取ることができますが、当時はできないことでしたから近江商人の行商はとても喜ばれたことでしょう。

こうした永い商いの実践を通して彼らが得た考え方「三方よし」とは、「売り手よし」「買い手よし」「世間よし」を言います。この理念は時代を超えて、近年あらためて注目されています。もう一つ近江商人を一言で表しているものに「しまつてきばる」という言葉があります。この意味は儉約につとめて無駄を省き、普段の生活の支出をできるだけ抑え、勤勉に働いて収入の増加を図るといふ、日常の心構えを表現しています。



彼らは成功し高い評価を得ていますが、凡人が形だけ真似してみても結果が生まれるものでもなく、普段の行いがすべてを左右するのだと感じました。

## 気がもめたランチタイム

30 分余の見学を終えランチの場所を求めて中山道(旧道ではなく国道 8 号)にもどり、先へ進みました。友が、近江商人博物館へ向かった時ラーメンの店が見えたと言うのです。確かにラーメンの店がありました、でもすでに廃業した店でした。紛らわしい看板は撤去してほしいものです。そこから少し行くと喫茶店「一息」があり、ランチ OK としてあるのでそこに決めました。ドリンク付き日替わりランチは味噌カツでした、一人はハンバーグ定食を 3 人は味噌カツを注文。でもちょっと気になったのは、われわれのほかにお客さんが 3・4 人と入ってきましたが、お姉さん一人で切り盛りしていました。案の定ちょっとばかし時間がかかりそうでした。でも、食べ終えたころにはコーヒーがでてきました、と思ったらコーヒーではなくコーヒーゼリーでした。これは good でしたが、やはりコーヒーは遅れ気味、そこで先に支払い準備をして待ち、あわててコーヒーを飲み店を出ました。

## コンビニの販売用軽トラック

食事を終えると時間は 13:30 ころ、予定ではあと 1 時間ちょっとで武佐駅まで歩きたいので、ちょっときついかかと心配になりました。そのため自然とこれまでに比べ早足になります。



奥石神社



セブンイレブンの販売車

ところが、歩道が片側にしかないのに右側になったり左側になったりしていて、車がけっこう多いのに道路横断を数回繰り返す必要がありました。この道路は国道8号ですから日本の幹線道路です、これが日本の道路の実情でありちょっとばかり情けない気持ちになります。そして国道8号から離れて新幹線の高架をくぐり、しばらく先で左に曲がると奥石神社の前に出ます。奥石神社の案内を見て2・3分も行くと、道端に軽トラのバンが止まっていました。珍しいことにこのトラックはセブンイレブンの販売車で、野菜や調味料などが見えた。この辺りはお店が少ないのだろうが、それにしても山奥でもないのに……。その先にとても大きな奥石神社の石柱と、これまた立派な鳥居が現れました。まっすぐに延びた参道の奥は木が生い茂っていました。その先に滋賀県指定「杉原氏庭園」の案内板がある。江戸時代に作られた庭園で、造られて以降手を加えていない貴重なものだという。しかし、辺りに庭らしいものは見当たらないので先に進む。ここからひたすら歩きとおすこと20分、地図に載っている西福寺に到着し、武佐駅まで2km程と判明した。

## 象が描かれた武佐宿説明板

西福寺から3分ほど行くと「西生来一里塚跡」の小さな石柱があった。そこから8分ほど歩くと武佐町会館の札をつけた木造の大きな門が現れた。よく見たら門柱の片側には「武佐宿脇本陣跡」の札も掛けられている。



脇本陣跡



武佐宿の説明板

武佐宿は65番目の宿場で、鈴鹿山系八風峠を越えて伊勢にいたる八風街道の追分がある。本陣1、脇本陣1、旅籠23の宿場だった。その少し先にポケットパークが整備さ

れて、象が描かれた武佐宿の説明板が設置されていた。この絵は象が享保14年大阪から京都、大津を経てここ武佐で一泊したことを描いたものと言う。その少し先にはムシコ窓のある白い漆喰仕上げの家が見られ、さらに、白い土塀にちょっとくたびれたような門があった。その土塀に「本陣跡」の木製の看板が掛けられていた。



武佐宿本陣跡



武佐駅にて

その本陣跡から数分で武佐駅が見えた、時間は14:30で14:55の電車に間にあったのでやれやれ。すると、電車が左手からきて停車しすぐに発車した。あれれ!! 駅の時刻表を確認すると、14:55の一本前の電車が14:30だった。まあいいかと、ベンチで一休みした。何せ急ぎ足で歩いたのでちょっとお疲れモードだが、今回も予定通り街道ウォーキングを終えることができた。このあと2回のウォーキングで、東海道と合流する草津に到着予定である。